

リコリスリコイル case
WANTED

watomal

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忌々しい電波塔事件から10年…

日本は犯罪の全くない社会となり、平和を謳歌。

治安のよさも、6年連続世界1位。

それは、秘密組織「DA(Direct Attack)」により事件やテロが未然に防がれているから。

電波塔のそばにある『喫茶リコリコ』

ここは、おいしいコーヒーと甘い和菓子が自慢の和風喫茶。

かくして、その正体はDAの支部。

ここではDAとしての活動のほか、街で起こった、さまざまな困り事にも応えている。

千束とたきなに更なる仲間ができたもしもの話

目次

blind	aman	the true nature of	al	a new companion
bullet	—	—	—	—
11	6	6		

a n e w c o m p a n i o n

街が寝静まり、静寂だけが存在する時間…

そんな時間にある建物の地下からは、何か弾ける音が響く
パンツパンツパンツ！

複数の風穴が空いたの先にはハンドガンを構えた男がいた

銃口からは硝煙が漂い、足元には数え切れぬ程の葉莖が散らばっている。

「ふう、今日はこんなもんか…」

男はそう呟きタオルで汗を拭ったあとソファに腰を掛ける

ピピピピピピピピッ

「もしもし…ああその話ね…ああ…ああ…分かってる明日には発つ…了解」

気怠そうな生返事を携帯に言い捨てる。

「東京か…久しぶりだな…」

そう言い、男は街と共に眠りについた

ここは東京、あの忌々しい電波塔事件から10年…

日本は犯罪の全くない社会となり、平和を謳歌している

「たきなー！早く早く！」

「待つて下さい！千束！」

「早くしないとまたミズキにドヤされるよオ！」

「寝坊したのは千束の方です」

嬉々とした声とそれを一蹴する声を交わしながら

スカートを翻し全力で走る少女2人

赤い制服を身に纏い黄色みがかった髪にリボンを結ぶ少女 錦木 千束（にしぎ ち

とせ）

黒い制服を纏い黒く艶があり腰まで伸ばした髪を靡かせる井ノ上 たきな（いのうえ

たきな）

「いよつしやあああああ！ついたあああああ！セエエエエエフ！」

「全く…誰のせいですか誰の！」

一軒家のような店構えに喫茶リコリスと書いた看板カフェに到着すると、たきなは喜

ぶ千束を横目にドアに手をかける

カランカラン

「遅かったじゃないか千束の寝坊か？」

冗談交じりに眉間に皺を寄せながら言い放ちながら杖をつき出迎えてくれたのは和服を着た肌の黒い男性はミカ

彼はこの店の店長であり2人の父親のような存在でもある

「いい加減ギリギリに来るのやめなさいよね」

呆れた顔をしながら机には「ゼクツイ」と泥酔と書かれた一升瓶を片手に酒を嗜む女性ミズキ

彼女は…まあ…アラサーである

「やだなあ〜店長たきなが寝坊しちゃって〜」

もう！早く起きないと遅刻するって言ってるでしよたきな！」

「人のせいですかそうですか…分かりました

今後一切私は千束を起こしてあげるような真似はしません

腹を立てながら言い放つ千束とたきなのやり取りを見て笑みを零している

「ほらあんた達！さっさと着替えた！」

ミズキは2人に着替えるように促す

「はい、今着替えてきます」

「え!?!ちよつとまっつて〜たきな〜」

「話しかけないでください」

」

「うわ…マジギレだ…コワ、ごめんってば！待って〜」

和気あいあい(?)とした雰囲気の中、彼女たちは店の奥に姿を消していく

「そういえばお前たちに報告しとく事がある」

ミカは思い立ち千束とたきなにコーヒーを入れる手を止める

「え?なにになに!?依頼!」

千束は目を輝かせながら机に手を付きびよんびよん跳ねる

「いや、違うんだ…依頼と言ってもいいのかわからんが、私が昔からの知り合いから頼まれてな、この店にしばらく客人が居候の形で来るんだが

時折お前たちにはその人の仕事手伝いをしてもらいたい」

「え?居候???手伝い???」

千束とたきなは驚いた

このようなケースの依頼は初めてだから無理もないだろう

「一緒にリコリスで働ける仲間が増えるから大歓迎!!え〜どんな子かな〜可愛い子だったらいいなあ〜ね!たきな!」

「わ、私はなんでもいいんですが、どのような人なんですか店長」

たきなはミカに問い掛けると

「うーん、その人が来るまでお前たちには詳細にしたいんだが……まあいいだろう、その人はお」

カランカラン

「あー！いらつしやいませー！」

ミカが話している途中で店のドアが開き千束が出迎える

「アメリカから来ました！麻畑 一成（まはた いっせい）です！今日からお世話になります！オネシヤシヤシヤシヤース！」

千束とたきなは目を見開き驚き隠せず

「お、男？」

今日もいい日常になる予感がしない

the true nature of a man

「麻畑 一成です!!」

「お、男」

千束とたきなは驚きを隠せず目を見開く

ドアの前にはパツと見10代く20代前半位の年齢だろうか身長180cmはあり、少し細めではあるが肩幅はガツシリしている

髪は黒くくせつ毛で若干ボサボサではあるが肌は荒れることなく綺麗である

青のダンガリーシャツに黒のスキニーパンツを履いて肩にはボストンバッグをかけている今どきの男性が立っていた

「今日から喫茶リコリスで働かせて頂きます!」

「よ、よろしくお願いします…」

千束が珍しく圧倒されているとたきなは思う

プルルップルルッ

「私だ」

ミカは電話を取り千束とたきなに席を外すサインを出す

「と、とりあえず自己紹介から……わ、私は千束！」

この子がたきなで、その呑んだくれがミズキ。

どんな形であれどんな人であれ私はあなたに会えて嬉しい！よろしく!! あ、年上つばいしタメ口でいいつすよ〜」

千束はいつもと変わらない態度で一成に自己紹介すると

「あ、了解つす！でもこの店では先輩なんで少しだけ砕けて話しますね！」

クシャツと笑いながらサムズアップする一成

「よ、よろしくお願いします」

たきなは少し警戒したように挨拶をする

「これなら一緒にここで働く仲間よ、もちろん店の事だけじゃなくて依頼のことも」

ミズキはたきなに安心させるよう優しく告げる

「依頼？という事はあなたはリリベル所属のですか？」

たきなは一成に問いかけると

「もしかしてたきなみたいにやらかした??？」

千束の鶴の一声でたきなはムツとした表情を見せ、一成はタジタジしながらたきなの質問に答えた

「今はもう大きく動いてない組織ではたるんすけど、DAみたく全国に配置されている組織フラタニティと言う組織に所属してて、組織から「日本のリコリスの力になり、お前の使命を果たせ」って啓示があつたんす！まさか、リコリスってこんな可愛らしい女の子がやつてるって知りませんでした！」

「啓示ってのはなんなの？組織は宗教団体か何か？」

千束は更に問い掛ける

「フラタニティでの依頼って人からの依頼じゃないんですよ。神が作った系織り機ってのがうちの組織ではありまして、その系織り機がランダムに織った系の降り具合を見て文字に変えて見たのが啓示ってやつつすね！まあ、話だけ聞いたら宗教団体か何かと思われても不思議じゃないけど！」

「へえ！私たちの知らない世界ではそんな組織もあるんだア」

千束から一成にキラキラとした眼差しを向ける

「一成には来て貰って早々に悪いが、お前たち依頼だ」

ミカが電話を終え千束達に話しかける

「内容はシンプルだ、とある廃ビルで薬の取引を阻止すること、敵の数は見張りも含めて10人から15人程で取引する奴ら以外は軽く武装している、くれぐれも警戒を怠るな

よ」

「了解！」

3人は声を揃え準備に移る

「くうく早速依頼かあ〜！一成さんの仕事っぷりが見れるう〜フウ〜」

マガジンに弾丸を詰める千束は興奮気味に一成と談笑していた

「あはは〜足でまといにならないよう頑張るよ！

そうそう、君たちの中で仕事中のポリシーとかあるかい？俺もこれから君たちと一緒にし〜とする仲間だしこの手の道のプロだ、足並みを揃えたくてね」

一成も千束と同じようハンドガンを組み立て不備がないかチェックしながら尋ねる

「千束のポリシーは絶対に人は殺さないことです

どんな人であれ絶対に殺さないんです」

たきなが千束代わりに答えると千束が続けて口を開く

「だって私は困ってる人を助けたいんだもん、それが例え敵でもね」

哀愁漂う雰囲気を纏った顔で千束が告げた

その表情をみて一成は微笑み

「素敵なポリシーだ、了解！君たちのポリシーに則って仕事をするよ」

また一成はクシヤツとした表情で笑いかけた

「さあて！みんな準備は抜かりない!?そろそろ出発とするよ！命大事にえいえいおー
！」

「そんな掛け声知りません、早く行きますよ千束」

「え!?!あ！ちよ！まってよ！たきな〜」

「だ、大丈夫かな…」

締まらない空気の中、3人は現場に向かう

blind bullet

3

取引が行われる廃ビルから100m程離れた建物の屋上から千束、たきな、一成の姿があつた

3人は双眼鏡を使い様子を伺う

「ここが取引が行われる場所ですね、建物の中に7・8人、ビルの外にも5・6人ですね情報通りの人数です」

たきなが情報の確認を行いながら後のふたりは突入の準備を済ませる

「んじや、ちやつちやか終わらせませるか!」

「……………」

「一成さん?どつたの?」

「ん、ああ、ごめんね、仕事が始まる直前には黙りこくつちやう癖があるんだけど気にしないで、ただ単に集中してるだけだから精神統一みたいなもんだよ」

「ほえ、すつごい、プロって感じがする!」

「君も一応プロでしょ…」

こんな会話のやり取りだが一成はどこか安堵した表情を見せる

「逃走経路も確保出来ました、2人とも準備はいいですか」

「いつでもOK!」

「大丈夫!俺も行けるよ!」

2人は静かに頷き、たきなが号令をかける

「突入5秒前…4…3…2…1…行きます!」

たきなの掛け声とともに3人は突入する

「ここには警戒来てないのか…ラツキ」

ルートは取引の行われる丁度正面の位置

ビルがまだ使われていた頃であろうデスクや椅子が隅の方で雑に置かれている

千束達は出来るだけ取引が見える位置まで移動し身を隠す

「ちゃんと荷物を受け取るところを確認してから阻止しないとねえ、渡した側と受け取った側の素性もハッキリさせたいし♪」

「千束…ちゃんと確認してくださいよ…」

たきなのボヤキが聞こえてくる

「わーかってるよー!お母さんかたきなは!

あ、来たよ！」

千束はたきなの言葉を跳ね除け姿を現した作業服やスーツを着た男たちの姿を目撃する

「あいつらが今回の標的か…一応だけでプランは？」

一成が千束に尋ねる

「荷物を受け取る場所を確認次第、殴る蹴る打つの3択だよ」

「…物騒だなおい」

「こんな仕事してて物騒とか言わないで下さい」

「お、俺にも容赦なくツツコンでくれた」

一成はたきなに初めてツツコンでくれた事に喜んだその瞬間

「あ！荷物を受け取った！」

千束が叫び3人は飛び出した！

「動くな！（ください）」

声を揃え警告する

「噂の制服を着た娘か！男がいるなんて聞いた事ないが邪魔される訳にはいかん！お前ら！殺せ！撃て！撃て！」

荷物を受け取ったスーツの男が叫び武装した男たちが一斉に発砲を開始する！

パンッ！パンッ！

ズガガガガガ！

ハンドガンやアサルトライフルの発砲音が重なり

廃ビルの中に響く

たきなは遮蔽物に隠れながらタイミングよく撃ち返し足や手に弾丸を叩き込む

「千束！一成さん！早く荷物を回収して下さい！」

たきながそう叫ぶ数秒前に既に走っている2人の背中があつた

「くっ……怯むな！撃て！撃て！」

ヒュン！

「（え？この子いま弾丸避けた？なんつー動体視力してんだい……）」

撃つてくる弾丸を次々と紙一重で避けていく千束の姿を目の当たりにする一成にも

弾丸の雨が降り注ぐ

「おっと」

パンッ！ガギンッ！

「（す、すご……一成さん撃たれた弾に弾丸を当てて相殺してる……）」

千束もまた一成の行動に驚きを隠せない

「早くズラかるぞ！」

複数人の男が壁隣アサルトライフルで応戦する

千束と一成は急いで左右の遮蔽物に身を隠す

その間にも標的は走って逃げていく

「やばいやばい！逃げられちゃう！」

焦る千束に反するように嫌に冷静な一成が

身を空に投げ出す

「え？なにをするの!？」

パンツ！シユルルルルル

一成が撃ち込んだ数秒後、数人の男の壁の後ろを走り去っていくスーツの男だけが足を抑えながら倒れ込む

「弾丸が…曲がった…？」

後方の位置にいたときながそう呟く

まるで野球の投手投げるサイドスローのように大きく腕を振りかぶり撃ち出した弾の起動は弧を描き走り去る男にだけ見事命中させたのだ

「な、何をした！」

「これはバレットカーブ…弾道が曲がらないって誰が決めた？」

千束とときは（この男…只者じゃない…）

生唾を飲み込み一成の姿を眺めているだけだった